

## あ

あまりに衝撃的なタイトルを見て思わず手に取ってしまった。森林は酸素を供給する「地球の肺」でも「水を溜める自然のダム」でもない等、これまで「常識」のように言われてきた「地球上に優しい」自然保護論をバツサリ斬り捨てるやや過激とも思える理論で始まっている。本書の内容は以下の3部構成となっている。

第部 間違いだらけの森林危機の論じ方

第部 森林の常識を疑う

第部 林業は森林破壊の元凶か？

第部、第部では森林危機をめぐる根本的な事実関係を科学的な目から洗い直し、第部ではとかく敵視されがちな林業の実態を中心に、木の現場に暮らす人々の問題にも目を向けている。

本書は極めて過激なタイトルではあるが、内容は様々な参考文献を調べ、さらに各方面の研究者を取材し意見を求めたり、実際に林業の現場を体験して現況を見ている。著者が自分の足で情報を集め、科学的根拠から「自然保護・森林保護論」に考察を加えている。そして単に批判するだけでなく随所に提言も行っており、むしろ堅実な内容と言えるだろう。著者は第三部の終章でこのように述べている。

「自然保護、とりわけ森林の保護を唱えるのがいけないというのではない。現在の森林保護の論調が、あまりに基本的な森林知識や林業の姿を知らないまま議論されている点を危惧しているに過ぎない。医者が診断を誤って治療したら患者の命が危ないように、根本的なところで

## 「森を守れ」が森を殺す！

誤っていれば保護どころか自然破壊を進めかねない。(中略)必要なのは、まず正しい知識を身につけることではないのか。そのうえで議論するなり考察するなりして、どんな対策を取るか結論を出せばよい。しかし、誤った情報を元にした結論を行動に移せば、ろくな結果を生まないだろう。」

本書の中で特に印象に残ったのはホタルに関する記述である。各地でゲンジボタルの棲む川の復元や人工河川作りが進んでいる。清流に棲むホタルの群舞は美しい自然の代名詞のように扱われている。しかし、著者が取材した淡水生物研究所の森下郁子氏はこう述べている。「(前略)数が増えるのは、ホタルが人間の作った田園環境に适应了からなの。適度に汚れていて隠れ処も餌となるカワニナもたくさんいるから、大発生して飛び回るわけよ」あまりに水や周辺環境をきれいにし過ぎてカワニナの隠れ処までなくなり、結果としてホタルが棲めなくなってしまった例も報告されている。著者はこれを受け、濁って悪臭を放つ人間にとっての汚い川も、土や有機物が



田中淳夫 / 著 洋泉社発行

溶け込んでいれば、それらが生物の栄養となり個体数や種類の増加につながると論じている。

極論と言える主張であるが、これは決して川を汚してもよいと言っているのではない。人間が見て美しい川(自然)と生物の息に適した環境とは同一ではない。ホタルは美しいから大切だが、ユスリカや赤潮は不快だからイヤというのでは勝手すぎる。人間の美意識を自然に持ち込むのは危険だと指摘しているのだ。

最近、河川環境の復元に関する業務も増加しており、ホタルはブームのようにになっている感もある。ホタルの観られる場所も多くなっているが、ホタルがいるから自然が復元されたという誤解が少なからず一般にあるように思う。私自身、これまでの調査等でとてもきれいとはいえない河川にもホタルが息しているのを見ており、清流にしか棲めないというイメージには疑問を持っていた。

本書を一読して、調査に携わる我々は、一般に誤解されがちな自然の復元や生物の多様性について、真実を正しく理解してもらう使命をも担っているのではないだろうかと思った。

(大阪支社自然環境調査室・井上剛)

## 著者紹介

田中淳夫

1959年大阪生まれ。静岡大学農学部林学科卒業。フリーライター。主な著書に『不思議の国のメラネシア』『チモールの知られざる虐殺の島』(共に彩流社)などがある。

第4回全国水環境交流会

1996年11月2日～3日

於 松下電器産業(株)教育訓練センター

主催 全国水環境交流会近畿大会実行委員会

共催 松下電器産業労働組合、地域と暮らしネットワーク

協賛 (財)大阪21世紀協会、環境事業団地球環境基金、(財)国際花と緑の博覧会記念協会、(財)日本グラウンドワーク協会、(財)日本財団、(財)琵琶湖・淀川水質保全機構

去る11月2日～3日に第4回全国水環境交流会「近畿大会」が淀川に面した大阪府枚方市で行われた。

この会は、1993年に埼玉県草加市での第1回全国水環境シンポ&交流会を契機に発足し、その後第2回が千葉県柏市で、第3回が静岡市で行われており、今年初めて近畿圏で開催されたことになる。なお、全国水環境交流会は全国をネットワークする組織であるが地域ごとにも活動しており、今年も北海道、東北、九州などで自主的なシンポジウムや勉強会、一斉清掃などを実施しているそうである。

今回の近畿大会のテーマは「水の恵み得るもの、水への恩返し」であり初日には、基調講演、分科会、交流会などが行われ、二日目は記念講演とともに琵琶湖や淀川など様々な場所でエクスカッションが行われた。

私は初日のみの参加であったが、基調講演では、農業、漁業、市民団体の活動など様々な立場からそれぞれの実践例が紹介され、非常にわかりやすく、また水環境が我々の生活に密着していることがあらためて実感された。分科会は15のテーマで開かれ、私の参加した「森の教室」でも基調講演と同様、森林あるいは林業と都市域の生活者との関わりについて考えさせられる内容であった。

本大会にあえて問題点を挙げるとすると、基調講演の時間が足りず参加者の生の意見を交流できなかったこと、分科会が多すぎて聞きたい分科会全てには参加できなかったことだろうか。しかし、これは夜の交流会や第2分科会で解消されたのではないかと思う。

【近畿大会】

水環境シンポ&交流会

～水の恵み得るもの、水への恩返し～

この会の事務局には当社の社員も参加しており、開催までの何回にもわたる実行委員会や、大会前日の準備などの状況を身近にかいま見ることができた。本当に数多くの打合わせを重ね、イベント業者の介在しない手作りの会がいかに裏方さんの苦勞で支えられているかを見ることができた。と同時に、それらの人々の人脈というネットワークのすごさに驚かされました。また、この大会

では、松下電気産業の労働組合が事務局として参加しており、大会会場も会社の教育研修センターを利用させていただいている。いわゆるメーカーの企業の方々がこのような『環境』を取り上げたシンポジウムに参加・協力するというのも、時代の流れだけではなく、個人の意識のなかへも環境問題が浸透していつている証ではないだろうか。(大阪社社長・浜田拓)

分科会テーマ・講師一覧(敬称略)

農業と自然環境.....	宇根豊 (「田んぼの忘れもの」)
森の教室.....	栗本修慈 (林業コンサルタント)、 海老沢秀夫 (朝日森林文化協会)
水辺の楽校.....	君塚芳輝 (淡水魚研究者)
治水とくらし～都市の川～.....	吉村伸一 (よこはまかわを考える会) 吉川勝秀 (国土開発技術研究センター)
水辺づくりの技術.....	片寄俊秀 (関西学院大学)
市民生活と水循環.....	藤井絢子 (滋賀県環境生活協同組合)、 広松伝 (「柳川掘割物語」)
市民参加とパートナーシップ.....	渡辺豊博 (日本グラウンドワーク協会)、 八木俊輔 (松下電器産業労働組合)
通信ネットワークと市民連携.....	幸野敏治 (Niftyserve川のフォーラム)、 杉原寛 (鶴見川流域ネットワーク)、 宗田好史 (京都府立大学)
歴史遺産と街づくり.....	山口祐造 (石橋研究家)、伊東孝 (日本大学)
水と地場産業.....	萩原孝一 (自然食品「ポケット」) 藤井吉造 (藤井農園)、北村真一 (「喜多品」)
漁業の立場から.....	鷺尾圭司 (明石・林崎漁協企画研究室)
ヨーロッパと近畿の水事情.....	大槻均 (財)琵琶湖・淀川水質保全機構
ヨシ原の生き物.....	恩地実 (甲南高校教諭)、 鍋島靖信 (大阪府立水産試験場)
農地の水路技術を考える.....	笠文彦 (龍谷大学理工学部)
流域ネットワーク.....	木村正徳 (木津川流域ネットワーク)